
風俗嬢 杏奈の事情

こは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風俗嬢 杏奈の事情

【Nコード】

N2401B

【作者名】

こは

【あらすじ】

19才の風俗嬢・杏奈。自分を殺しながら働き、自分の全てをツトムに奪われる。空っぽの人生を救ったものは…。これは私の体験をもとに作りました。どうして風俗で働いてどうして辞めたのかを、最後まで見守ってほしいです。 性描写はありません

第一話：はじまり

杏奈、19才。新宿・渋谷など都内の風俗店を転々とする風俗嬢。でも、どこにいても落ち着かない。

「だんだん、自分がなんなのかってわかんなくなってるんだよね。」

「どついう意味？」

「なんてゆーか…。家にいるときはお父さんとお母さんの娘の私じゃん？なのにここでは杏奈じゃん？どっちが本当の私で、こんなとこで何やってんだろ…とかね。」

「杏奈ちゃんはこの仕事嫌いなのか？」「当たり前だよ。好きでこんなことしないわ。」

「でも結構稼いでるじゃん。好きなもの買い放題でしょ？」

「…何て答えたらいいか解らなかった。笑いながら曖昧に頷く。待ち合い室のインターホンが鳴った。

「杏奈さん、次120分で、セーラーとブルマで、5号室にお願いします。」

また、自分を殺さなくちゃいけない。地獄の時間がやってくる。

店を出るとツトムが車で待っている。無言で助手席に乗り込む。

「よっ、今日はいくら？」車を走らせながらこっちも見ずにツトムは言う。そして、私は黙って五万円を渡すのだ。

「マジかよ。もっと頑張れよ。」

そうして全てを奪われる。お金も、時間も、自由も。『私』という人格さえも無視して、私を追い詰めようとするのだ。「まー、明日は頑張ってね。」

それには答えず、小さく、死ね、とつぶやいた。

第二話：ツトム

ツトムは私より五つ年上だ。家はわりと近く、友達の働いている金融屋で、催促の仕事をしている。利用者がどこかに逃げても、ここで情報を仕入れるのかどこまででも追い掛ける。そして返されるまで追い込む。そんな仕事をしている。

でも、それを知ったのは付き合った後のことだった。

「なあ、俺と付き合わない？」

突然告白されたのは、18になったばかりの頃だった。でもその頃私にはずっとずっと好きな人がいた。恋人ではないけど、恋人のようない関係だった。

「無理だよ。好きな人がいるの。その人とこれからも会っていききたいから、付き合えない。」

「…会ってもいい。付き合っていくうちに、俺のこと好きになってくれればいいから。」

「でも今付き合ったら、必ずツトムを裏切ることになる。だから無理だよそれは。」

「…そいつとはどんな関係なの？」

「付き合ってるようなもの。しょっちゅう会ってるし、キスしたりそれ以上のこともするよ。」

それでもツトムはしつこかった。

「俺のこと嫌い？」

「いや…嫌いじゃないけど…」

「俺はお前は他の女とちよつと違うと思う。きつとお前とならうまいくいと思うんだ…！」

そんな話を延々と繰り返すうちに、ついに私は折れてしまった。この頃のツトムは、優しくて楽しかった。ツトムとなら、幸せになれ

るかもという気持ちがあった。
でも、後にわかったのは、この時の私はツトムのことを何も知らなかったということ。

第三話：仕事

私は同じ店に長く勤めることが出来ない。理由は二つあり、一つは長くいるとどんどん気が滅入り、自分を取り戻せなくなりそうな気になるから。二つ目は店を変えると少しリフレッシュできるから。

たくさんのお店で色んな女の子を見てきた。興味本位で入ってきた子や、ベテランのナンバーワン。年を10もサバをよんだり昼間は普通のOLや女子大生、看護師、子供がいる人もいた。

風俗と一言で言っても様々で、見掛けはただのキャバクラでも突然お触りタイムが始まり、女の子が上半身裸で客の上にまたがったりするお店もあった。

私は接客中、心のスイッチを切る。こうして自分というものを必死で守るのだ。

でも、『風俗嬢杏奈』になりきれなくて、戸惑ったり泣いたりするときもある。

今のお店はいわゆるイメクラ。客の好きなコスチュームを着て、好きな設定で好きな役をやる。『自分』でなくていい分少しは楽だ。

私は背が低くて童顔のため、学生やいじめられる役が多い。

キャバクラのように常に客と同じ空間にいるわけではなく、たまに一人で休憩する時間もある。逆に忙しければ常に裸といっても過言ではなく、肌はローションで乾燥し、腕は痺れあごがくがくしたりと、まさに精神的にも肉体的にもきつくて辛い仕事だ。

給料はほとんどが日払いで、接客した時間＋オプション―雑費という感じになる。今のお店だと大体一日七万円、多くて十万ほどになる。どうでもいいことだけど。

第四話：クリスマス

恋人になったツトムは、前と変わらず明るく楽しくてちょっとワガママな奴だった。

急に夜中電話をしてきて

「今からドライブ行くぞ。寒いから厚着して来いよ。」

など日常茶飯時だった。ある時は夜景の綺麗な丘に、ある時は横浜に買い物に。

全てが変わったのはツトムの誕生日、つまりクリスマスの日だった。私はツトムとは会う約束をしてなかったので、前から好きだったコウタと会っていた。

するとまた突然ツトムからの電話。

「お前今どこ？」

「家だけど…。」

「俺は今銀座にいて、ブレスレット探してんだけど、お前に合うサイズがなくてさ。」

「えっ？」

「今日クリスマスじゃん。俺の誕生日でもあるけど。お前ブレスレットいつもしてねーじゃん。今はカルティエ見てたんだけどさ。」

「はっカルティエ?! そんなのいらないよ。だって私お金ないしブレゼントなんて用意してないもん!」

「別にいいよ。よくないけど(笑) 今日は何してんの?」

「えっと今日は…ちよっと人と会ってる…。」

「へー。ふーん。あっそう。彼氏の誕生日ってゆーのに、ひどい女だなーお前は!」

「だ、だって前に『クリスマスどうする?』って聞いたら、『わからない』って言ってたじゃん!」

電話を切った後、なんだか胸にもやもやが出てきた。ツトムは私の

ために走り回ってくれていた。なのに私は何をやっているんだろう…。申し訳ない気持ちでいっぱいになり、その日は一日ブルーだった。

そして、もうコウタとは会わないと決めた。これからはツトムのお持ちにゆえようと…。

第五話：生理

ツトムだけを見ていこうと決めた矢先、事件は起こった。

「なんか最近腰が痛いんだよね。」

「ふーん…てかお前、生理きてなくね？」

「あつ、そういえば遅れてるね。」

「異様にトイレ近いし、妊娠でもしてんじゃねーの？」

「まっさかー。」

私は気にも止めてなかった。だけどツトムは違った。徐々に顔が青ざめ、赤くなり、興奮するように言った。

「いや絶対そうだ。お前は前の男としてたはずだ。調べる！」いやいや…あんたとしてもしてたじゃん。そう言っと、

「俺は子供の頃からの病気で、子供はできねーんだよ！」

ツトムは完全に私を疑っていた。だけど始めに、『好きな人と会っていい』と言ったのはツトムだ。それにきつと生理は来るだろう、と告げると

「もし出来てたら、おろさなくちゃいけない。そうするとお前の心と体にどれだけの負担がかかるかわかってるか？！お前が遊ばれ傷付けられたことにキレてるんだ。」

「誰が遊ばれてんのよ。」

「じゃあ電話してみろ。責任を取らせろ！」

凄じい剣幕だった。でも私は絶対嫌だと断った。コウタをツトムに合わせたら何されるかわからないし、私は元々生理が不定期だから、遅れることもしばしばあるのだ。

どうしても今ここで電話しろと怒鳴るツトム。話は平行線だった。しかし、ツトムのネットワークは凄かった。ほんの少し情報だけで、彼を捜し当てたのだ。

「お前の好きな奴って、『コウタ』って奴だろ。そいつね、俺の妹

の友達の『彼氏』だよ。」

一瞬、時が止まった。固まる私を見て、ツトムは更に続ける。

「妹が『また浮気かよ』って言うてた。お前だけじゃねーんだよ。」

私だけじゃ…ない。

第六話：コウタ

コウタとは、一年くらい前からの関係だった。誰よりも優しく、穏やかな人だった。芸能人で言えば、リップスライムのRYO-Zのように丸くて平和な雰囲気の人。

コウタと一緒にいるいつも笑顔で、幸せだった。服に顔をくっつけると、いつもお香の匂いがして、この匂いが好きと言うと大量に買ってきてくれたりした。

一度だけ、人生で初めての告白をしたのもコウタが相手だった。返事は

「いつかは付き合いたいって思ってる。だけど今はバイトも忙しくて中々時間も作れないし、前の彼女と別れたばかりで…。」
「というものだった。でも私は信じていた。いつかきつと私を見てくれるって。私を好きって言ってくれたコウタを信じていた。何より、今一緒にいれることが大事だったけど。」

彼はデリバリーのバイトをしていて、確かに忙しい人だった。けどその合間に会いに来てくれたり、終わった後に会いに来てくれたり、何だかんだで週に三回くらいは会っていた。

ツトムと付き合っていることを告げた時、コウタは驚いていた。

「えっツトムって…あの？」

「知ってるの??」「この辺じゃ結構有名だよな。」

「へえ…」

「悪い人でしょ？」

「えっ? あっ、…うん、そうなのかなあ。」

「あの怖いよね。ハッパ以外もやってるでしょ。」

「うーん…やってるのかなあ。売ったりはしてるみたいだけど。」

「絶対やってるって。やめたほうがいいよ。ハッパまでだよ!」

「…そういう問題?」

第七話：発覚その後

ツトムは、私にコウタと連絡を取るよう迫った。なにもかも知られた今、そうせざるを得なかった。

私はとりあえずメールを送った。

《コウタ、実は生理が遅れているの。》

一時間経っても返事はこなかった。すぐに痺れを切らしたツトムは、電話で直接話すよう指示した。

でも、何度かけてもコウタはでなかった。嫌な予感がした私たちは、ツトムの携帯からかけることにした。

しばらくの呼び出し音の後、

「……はい。」

コウタが出た。私はツトムに声が聞こえないように受話音量を最小にした。

「あつ……私だけど……。」

「うん……電話出れなくてごめん。メール見たよ。今、ツトムくんといるの?」

「うん……。ごめんね。」

ごめん、と言う私の言葉にツトムの表情が険しくなった。

「謝らないで。俺の責任だから。責任はちゃんと取るから。心配しないで。」

「うん……でも、どうしよう。」

「したいようにするよ。どうしたい?」

「……どうしたい……」

私が呟くように言うとツトムが突然携帯を奪った。

「てめえ! どうしたいじゃねーだろ! てめーで考えろ! どう責任取るつもりなんだよ!」

そこからはコウタが何と言っていたのかはわからない。だけど多分、何も言えなかったと思う。ツトムの怒りは激しかった。

「こいつは今は俺の女なんだよ。中途半端な気持ちで中途半端なこ
として、心も体も傷付けやがって！どうせ結婚するつもりなんてね
ーんだろ！」

凄じ剣幕でまくしたてるツトムを横に、私はただおろおろするだけ
だった。

「お前今からウチに來い。逃げてても無駄だからな。」

そう言つて住所を説明すると、ツトムは一方的に電話を切つたよう
だ。

私はこれから何が起こるのか想像もできず、恐怖しか感じられなか
った。一方のツトムはリラックスして、お前は何も心配しなくてい
いよ、と言つた。

第八話：呼び出し

30分後、コウタが原付に乗ってやって来た。表情は固く、今まで見たことないような、むしろコウタじゃないような感じさえた。家の前の塀にもたれかかり、ニヤニヤしながらツトムは言った。

「コウタくん？」

コウタはしつかりと、ハイと答えた。

「で、どうすんの？」

「えっ……」

苦笑いを浮かべながら答えに困るコウタ。

「何笑ってんだよ！この責任どうとるのかって聞いてんの！」

ツトムの怒鳴り声に、コウタの表情が一気に凍った。

「えっ……と、責任は取ります。すぐにでも金も用意します……」

そこでツトムの怒りが頂点に達した。右腕をひと振りすると、コウタの鼻から血が噴き出た。

「金を払う？墮ろせつつってんのかよ？」

「あっ……いや……」

鼻を押さえながら後ずさるコウタ。

ツトムはコウタの腕を掴み、半ば引きずるようにしてマンションの奥へと連れて行こうとした。

「待ってよ！コウタは悪くないよ！私が悪いんだよ！」

片方の腕にしがみついて止めようとしたけど、びくともしなかった。私とコウタをひきずったまま歩くと、

「お前邪魔だから、部屋入ってる。」

私に言った。

「嫌だ！私も一緒にいる！」

「ふざけんな！もう殴んねーから戻ってろ！」

そうやって無理矢理戻されると、ツトムはしばらく戻ってこなかった。私は気が気じゃなく、長い時間を一人で過ごした。

どれくらい経つだろうか。様子を見に行こうか迷っていると、一人の男を連れて二人で戻ってきた。

第九話：借用書

ツトムの連れてきた男は、ユウスケだった。

「久しぶり。」

ユウスケは、私の友達の彼氏であり、ツトムの五つ下の後輩でもあり、さらにはコウタの知り合いでもあった。世間ってこんなに狭くていいのか。

「ユウスケ…、コウタは？」

「コウタくんは帰ったよ。」

「そう。ツトム殴らなかった？」

「うん、大丈夫。」

私が部屋に戻った後何があったか。二人の話では…

ツトムはコウタを近くの公園に連れて行き、電話で自分の友達を呼び出した。しばらくするとユウスケを始め数人の男達、中にはありがちな黒塗りのベンツで登場したという。

「まーそこで色々聞いたんだけど、やっぱりあいつ、お前とは遊びだったって認めたよ。あと、これ。ホラ」

そう言ってツトムは紙切れを差し出した。受けとって見てみるとそこには、コウタの名前と住所、日付、そしてツトムに20万円を借りたと書いてあった。

「これって…借用書？」

「そう。病院代ね。」

「病院代って…まだできてるかどうかもわからないのに。」

「いや、あいつには出来たって言ったから。お前の慰謝料も含めて、これからもっと絞り取ってやる。」

「ちよつと！そんなこと頼んでないわよ！やめてよ！」

「うつせーな！俺だって傷付けられてんだよ！あんなくそみたいな男にお前傷付けられて、その上あんなくそみたいな男をかばうお前もム力つくんだよ！」

「…じゃあ私はどうしたらいいの？」

「別に何もなくていいから、あんな奴忘れるよ。お前があまりにもバカでかいそうでしたねーよ。」

私はもう何も言えなかった。携帯のコウタのメモリーを消され、会うことも禁止され、もう関わりを持つなと言われた。ツトム言う通りにするしかないと思った。

第十話：重たい空気

「お前、クリスマスの日あいつと会ってたんだって？」

ツトムの突然の言葉に心臓が張り裂けるくらい波打つ。

「えっ?!」

「俺色々調べたんだよ。メールの履歴とかな。しかもお前から誘ってんじゃねーか。」

「あっ…いや…」

逃げ場がなかった。本当のことだから。確かにあの日はツトムとの約束がなかったのでコウタを誘ったのだ。でも、あの日でコウタと会うのはやめようと思っていた。でもそんなこと今更言っても言い訳にしか聞こえない…。

「お前バツカじゃねーの？遊ばれて当然だよ。お前から誘ってんだつたら、あいつ悪くねーじゃん。かわいそうでもなんでもねーよ。お前なんかの為にあいつ殴った俺って何なんだよ！」

「…ごめん。」

重苦しい空気が部屋中に流れる。

「もうバカらしいわ。むしろこっちがあいつに金払わなきゃいけないじゃん。何も悪くねーのに殴って更にこんな紙まで書かせて！」

「…。」

私は心の中で、あんたが全部勘違いしてやったことじゃん、とひそかに思っていた。

「ともかく、俺はあいつに謝ってくる。お前が金払えよ。」

「へっ？」

「当たり前だろ！こんな事になったのは全部お前のせいだろ！」

「そんな…お金なんてそんな持ってないよ…」

「知らねーよ、働けよ、死ぬまで。とりあえず立て替えといてやるから。」

この時はまだ、事の重大さやこれから自分がどうなるのかなどは、

深くは考えていなかった。

「こんな女を好きになった自分が情けねーよ。」

そう。この時はツトムが私のことを好きなんだと思ってた。

第十一話：二十万

そうして私は風俗で働くことをすすめられた。なぜかといえば、金額と返済期限が、私にはあまりにも重かったから。貯金も無く、時給900円のバイトを細々とやっていた私にとって、一週間以内に二十万円というのは無理な話だった。

キャバクラも考えた。しかし新人で指名もない私には、時給だけであの金額には届かないだろう。必然的に、風俗という道しか残らなかった。

風俗では、新人というのは割りと客がついた。新人「素人っぽい女の子」というのが客にはウケるらしい。私は新宿のとあるお店で、一週間もかからずに二十万以上稼いだ。

その間家には帰れず、毎日ツトムの家と店を往復していた。逃げたり無駄にお金を使わない為だ。

「はい、二十万。」

袋にも入れずにそのまま手渡す。

「はい、ごくろーさん。」

ニヤニヤしながらツトムは受け取った。

「お前、テクニクとか上がったんじゃない？もつと腕上げて俺に披露しろよ。」

何を言っているの？私がそんな表情で見つめると、

「とりあえず今回は許してやるよ。でも次やったらお前も男も殺すぞ。」

と言った。この人ならやりかねないな、と思った。でも、とりあえず終わったんだ、という気持ちでスッキリすらした。この一件がなければコウタに彼女がいることはわからなかったし、これで良かったのかな。コウタには迷惑かけたことを謝りたかったけど、もう会うこともない。好きという気持ちはまだ少し残ってたかもしれないけど、ツトムに散々コウタの悪口を言われ、そんな男だったのかな

と、洗脳された。

第十二話：悪夢

大変だった二十万を返し、また平穏な日々が始まるのかと思ってた。実際は、そんなに甘くなかった。

「おい。」

ツトムが真剣な顔で呼ぶ。

「あのな、コウタに金払ったんだけど、あいつかなりキレてるみたいで、上の奴に頼んだらしいんだよ。」

「・・・何を？」

「まあ、簡単に言えば復讐？」

「は??？」

「いやだからさ、俺結構ひどいことしちゃったじゃん？だから仕返しっつーかさ。」

「だってお金払ったじゃん。」

「うんでもそれだけじゃ足りないんだって。」

私にはどういう意味なのかさっぱりわからなかった。コウタが復讐だなんて・・・。

「まああの二十万はいいとして、あいつも上の奴に頼んじまったからそいつにも金払わなきゃいけないんだよ。復讐うんぬんは抜きにしてもさ。で、また面倒なやつに頼みやがってさ。俺も顔くらいは知ってるんだけどさ。」

「・・・それで？」

「そいつは俺には手は出せねーんだよ。でもお前は別だろ。」

「だから・・・何？」

「お前があいつに金払え。」

一気に頭の中に色々なことが巡った。

まず、コウタが復讐なんて信じられない。でも本当だとして、私に何かしようとしたとして、それもまたお金で解決？また働かなくちゃいけないの？なんとかならないの？もうあんなことするのは嫌・

・・。

「また二十くらいでいいだろ。こういうのは早い方がいいから、また明日から働け。」

「ちょ・・・ちょつと待ってよ！そんな簡単に言わないでよ。嫌だよもう・・・。」

「そんなこと言ったってしょうがねーだろ！お前がまいた種だよ。」
あんたが勘違いしてあんたが殴ったんじゃない・・・。

「俺はもう関わりたくねーよ。でもお前の身が危険だから言ってるの。とりあえず俺といれば安全だけど、金は払って早く終わらせろよ。」

どうしようもなく涙が出てくる。

「てゆーか、泣きたいのはこっちだから。」

第十三話：一度だけの帰宅

それからまた違うお店で働き、二十万を払ったけど、もう遅かった。話はどんどん膨らみ、どんどん色んな理由をつけて、お金を請求されるようになった。

私は、直接コウタにもコウタが頼んだ誰かにも会っていない。全部ツトムが連絡をとって会ったりしてるらしい。

私はまた、あれから家にも帰れず両親とも連絡を取れず、ただひたすらツトムの部屋と店の往復を繰り返していた。毎日毎日、今日はいくら稼いだかを報告する。少ないとサボったとか無駄遣いをしたとか言われて怒られて、たまに、またクリスマスのことを持ち出して殴られたりした。

私は一度だけ、家に帰ることを許された。着替えも何も持っていないので、とりあえずの身の回りのものだけ持つてくるように言われたのだ。ただし、両親が仕事でいない昼間に、時間制限付きで出された。タクシー代を渡され、時間内に戻って来なかったらまた殴ると言われた。

ツトムは私の住所を知っている。逃げたり余計なことをしたら家族にも迷惑がかかるかもしれない、そう思うと言う事を聞くしかなくなっていた。

家に帰ると、誰もいない部屋で、何も変わらず、でも何だか知らない家のように遠い感じがした。だけど浸っている時間もなかった。往復の時間もいれたら、本当に数分で仕度をしなくてはいけなかった。

バッグに入れられるだけの服を詰めると、私はふと台所に向かい、小さいナイフをポーチにしまった。そして後る髪を引かれる思いで家を後にした。

待たせていたタクシーに飛び乗ると、また、ツトムの待つ部屋に戻った。

母が仕事から帰ってきたら、誰かが家に入った痕跡に気づくだろう。きっと私だとすぐわかる。そしたらどんな気持ちになるのか・・・。それを考えたらまた涙が止まらなかった。

第十四話：カオリ

私の休みは週に一度あるかないか。毎日入れるだけ店にいる。今いる店はあまり繁盛はしていないので、客がいなときは仮眠ができる。

毎日毎日働いて、自由もなくて、それでもヤケにならずに住んだのはカオリのおかげだった。

カオリは私の親友で、同じ店で働いている。どうして働いているのかというと、彼女は彼女でヒモみたいな男のために稼いでいるのだ。理由は違えど同じような境遇にいる私達は、この時期により絆を深めた。死にたい、と思う事があってもカオリと話をしていると心が落ち着いて、気が紛れた。

この頃の私はもうコウタの話は関係なく、ツトムにお金を渡さなければいけなくなっていた。ツトムがある日突然

「言わなきゃいけないと思ってたんだけど、俺病気で薬代とか検診代が結構いるんだよね。」

と言い出したのだ。さらに

「あの一件のストレスで、さらに最近体中が痛いんだ。お前のせいなんだからお前が払え。」

と突きつけ、もうツトムに恐怖すら感じていた私は素直に従うしかなかった。

「俺が死んだら嫌だろ？お前が稼がなくて薬が買えなくて死んだらおまえのせいだ。」

それがツトムの口癖になった。

そうして私は週に何万も必要になったけど、今のお店ではきつかった。

でも、繁盛してるお店に戻るほど心の余裕もなく、ギリギリで何とかやっていた。

それでもツトムは容赦なく、

「明日九万必要。無理だったらどうなるかわかってる？」
と脅してくる。その時カオリに何度助けられたことか。カオリへの
借金何十万にも膨れ上がった。

第十五話：疑問

ツトムには何百万渡したかわからない。それでも始めは、自分がいけないんだからしょうがない、ツトムを傷つけたのは私だし、そんな私を見捨てずに一緒にいてくれて、コウタ達からも守ってくれたんだから、感謝しなくちゃいけないと思っていた。

それがだんだん、やっとオカシイと思うようになってきた。

私はあれからコウタとも連絡を取っていないし、そもそも本当にコウタにお金が払われたのか、本当にコウタがお金が欲しいと言ったのか、疑うようになった。

その話はもう終わったとしても、今現在ツトムの病気というのは本当なのだろうか。よく聞く難病だし、実際病院の診察カードも持っていた。だけど、私が診察に付いて行ったりしたわけでもなく、薬だって何の薬なのかわからない。何かの病気で病院にかかっていたとしても、そんなにお金がかからないのかもしれない。

そもそも、始めからこの人は私のこと好きじゃなかったんじゃないか……。何もかも知ってて近づいたんじゃないのか……。仮に好きだったとしたら、彼女に風俗で働かせるなんてできるはずがない、やっとそこに気付いた。

でも、そんなことツトムに聞けなかった。殴られるのがわかっていだから。

ツトムは相変わらず毎日私を縛り付け、追い詰め、動けないようにしていた。私ももう疲れ果て、抵抗する気力もなく、ただ毎日働いていただけ。

「お前最近元気くない？そんなんじゃないよ。腕を磨く努力もしくちゃ、若いつてだけで甘えてんじゃないの？ちゃんと営業もしてんの？！」

人の気も知らずに勝手なことばかり。

そういう態度に気付いたのか、口喧嘩が始まり、最後にツトムの言

った言葉。

「お前って本当に最低なくそ女だな。生きてる価値あんの？死ねよ。」

私は裸足のまま家を飛び出し、階段で屋上に向かった。何も考えていなかった。だけど、途中で止められていなかったら多分飛び降りてたと思う。

「何考えてんの？死ねば終わるとでも思った？」

何も答えなかったけど、私の頭の中には、バッグに入ってるナイフのことしかなかった。

第十六話：釈放

この日々は一生続くものだと思っていた。もう私はこのまま長生きもせず誰も知らないところで死んでいくのかも。逃げようと思えば逃げれたのかもしれないけど、そんな考えは微塵もなかった。どこまでも追ってきそうだし、家族に迷惑がかかるのが一番怖かったから。

いつから私の人生はこんなことになったのかなあ。どこで間違ったのかなあ。

もっとちゃんとした人間だったら、こんなことにはならなかったのに。私は世界一親不幸な娘だ。

私の両親は真面目でまっとうな人生を歩み、一人娘である私にも幸せな人生を送ってほしいと人一倍願って育ててきてくれた。そんな思いを踏みにじり、今どんな気持ちで毎日過ごしているのか・・・。

ところがある日突然、地獄から一步助け出されることになった。

「お前もう家帰っていいよ。」

あまりにも突然だった。

「えっ・・・。本当??」

「うん。でも今まで通り働いて、病院代も払えよ。」

「う・・・うん。」

嬉しさと共に少しの不安と、何とも言えない、いきなり空に放り出されたような感覚になった。

それでもすぐさま荷物を整え、外に出ると、日の光がいつもよりまぶしく感じて、意味も無くまわりを気にしたりした。

ツトムの部屋は外からみえないように、カーテンは常に閉められ、隙間という隙間にガムテープを貼り、一切外と遮断されたような家だったから、監獄からやっと釈放されたような気分になった。それでも家に帰るのはためらった。

両親とは一度も連絡を取っていない。携帯はツトムに管理され、始めのほうに私のフリして母にメールを送っていたけど、その内容は知らないのだ。

とんでもない内容のメールだったら……。そんな不安が頭をよぎり、中々家の中には入れないでいた。

ちょうど仕事で誰も家にはいなかったもので、一人で静かにみんなの帰りを待った。

第十七話：高校二年生

思えば私は不運な人間だなあと思う。今までに体験した一番辛かったこと。それは高校二年生の時の体験だ。あの時、もうこの先これ以上不幸なことはないだろうと前向きに生きることを決めたけど、あの時と今とどっちが不幸だろう。

どちらも、すぐ人を信用する私が悪いのだと、改めて考えると思うけど。

高校二年生、私は毎日を謳歌したくて、たくさんの友達と遊んだ。カラオケに行ったり、化粧を濃くしたり、お酒に興味を持ち出した。りしたのもこの頃だ。

そんなある日、友達の誘いで飲み会に参加することになった。飲み会と言ってもまだ子どもでお金もない私達は、もっぱらコンビニなどで安いチューハイなどを買い公園や家で飲むのが主だったけど。その日も例に漏れず外で飲んでいた。

メンバーは、私を誘った女の子一人と、男の子は全員顔見知りで三人いた。全員が会ったことあったので話も弾み、盛り上がった。酔いもまわってきたころ、私がトイレに行こうとすると、男の子の一人がトイレまで案内してくれた。そこは公衆トイレではなく、友達の親がやっているという事務所のような場所だった。私は

「ありがとう、戻っていいよ。」

と言って用を足し、トイレからでると何故か彼はまだそこにいた。そして私の腕をひっぱり奥に連れていき、抵抗する私を押さえつけ乱暴しようとした。

と、そこにもう一人の男の子が丁度よくやって来て、私達を見つけ た。私が助けを求めると、おもむろにこちらに近寄り、参加した。それでも私は必死で抵抗し続け、大きい声で叫んだ。すると

「別に抵抗してもいいけど、だったらもう一人の女の子でもいいん

「ただ。」

と言われた。私の友達はまだ男の子と付き合ったこともなくて、当然ヴァージン。物凄く純情な子で今も片思いをしていてそれを応援している。友達を傷付けるのだけは避けたかった。

だったら、私がちよつと我慢すればそれで済む話だと、抵抗をやめて素直に彼らを受け入れた。事が終わり呆然としてみると、ドアから数人の男の子たちが入ってきた。知らない人もいたけど、中には同じ高校の子もいた。彼らはずっと窓から私達を見ていたらしい。ふと気がつくとなりの窓が少しだけ開いていた。

「アイコはどこ？」

と、友達の名前を尋ねると同じ高校の子が、

「帰ったよ。アイツも見てた。ショック受けて帰っちゃったよ。」
とさもなさ気に答えた。

「見てたってどういう事？！」

「俺らが誘ったの。アイツにはお前が好きでああいうことしてるって言ったら、怒って帰った。」

「どうして?! 私は、自分が抵抗したら・・・アイコがって・・・だから・・・。」

「はは。そんなのお前を大人しくさせるための嘘に決まってんじゃない。」

何よりも辛かったのは、彼らが周りの人達に、私が誘ったとか言いふらしてまわり、みんながそれを信じ、ヤリマンという陰口をたたかれ、アイコともそれ以来気まづくなってしまったこと。と言っても、私も本当のことは言わなかった。言ったらきつとアイコが、自分を守る為に私が犠牲になったと自分を責めてしまうかもしれないから。言っても今更しようがないことだし、アイコはきつとずっと私を軽蔑していくんだらうなと思うと辛いけど、しょうがない。ただひとつだけ、あの主犯の男の子が婦女暴行の罪で家裁に行った

と噂で聞いたときは、ザマーミロと心の中で思った。

第十八話：家

高校二粘性の時に、もう後の人生そんなに不幸な目には遭わないだろうとタ力をくくっていたけど、たった二年でまた不幸のどん底に落ち込んでいる。今は家に帰ってこれたからまだマシだけど、ツトムから離れられたわけではない。それに、今の状態が『マシ』と思えるほど、私の感覚はマヒしていた。でもまだ家に帰って来たという心地はしない。まだ誰にも会っていないから。その時、

ガチャッ

家の鍵が開けられる音がした。この時間に帰ってくるのはおそらく母親。玄関の靴を見て、私がいることに気づくはずだ。物音がいったん止まる。そして静かに家の中に入ってくると、部屋から出てきた私と目が合った。

「・・・おかえり。」

と小さく言う私。母は、人一倍世間体を気にする人で、高校も偏差値の低い学校に進んだ私に、ヒステリーを起こしながら「これじゃあ人に言えない」と言い放った。優しくて家族思いだけど、真面目で常識から外れるということとは考えられない。そんな母だから、叩かれたり罵られたり、問い詰められたり、勘当も覚悟した。

すると母は、

「・・・ただいま。」

と言ったまま押し黙ってしまった。重たい空気に耐えられずに部屋に戻ると、ガサゴソと何も無かったかのように夕飯の支度をする母の包丁の音が聞こえた。

そして

「ご飯できたよ。食べるでしょ？」

と何事もなかったかのように私の部屋に入ってきた。前と変わらな

い優しい声で、でもちよつと緊張した様子で。

「うん。」

と笑顔で答えると、母も笑った。

二人で夕飯を食べていると、父が帰ってきた。父も何もなかったかのように、相変わらぬ無口で並んで夕飯をつついた。

二人とも、何も聞かなかった。私も、何も言わなかった。

第十九話：カオリの転機

無事家には帰れたものの、依然私の仕事は変わらない。

ツトムに言われるまま要求された額を期限までに渡すことだ。

好きなものも買えない。ご飯もいつもおにぎり。終電を逃しタクシーを使うと責められるから始発を待つ。でもカオリは全てに付き合ってくれた。こんな生活に耐えていられるのは、カオリの存在が大きい。彼女もまた、ろくでもない男に苦しめられて、私が支えだつたはずだ。私達はいつもお互いを支え合つて励まし合つた。

でも私もカオリも間違っていた。もっと早くに決断するべきだったのだ。

私達は限界を感じていた。働いても稼いでも、次々とやってくる新しい地獄に。私は言葉で精神的に追い詰められたり脅されたりという感じだったけど、カオリの場合は身体的な暴力を振るわれていて、腕にはいつも無数のアザがあつた。それでも離れられなかったのは、やっぱり好きだったんだろう。

そんな時、カオリの方である決定的な出来事が起こつた。私達は仕事の他に、自分達で店を通さず客をつかまえていた。そこで客と三人で会つていた時、カオリの携帯に男から連絡が入つた。

出てみると無言。しかしよく聞くと微かに話し声が聞こえてきた。

泣き叫ぶ女となだめる聞き慣れた男の声。どうやら男が浮気をして、それを女が責めているようだった。

怒り心頭したカオリはすぐさま私と共に男の家に向かった。必ず家に帰ってくるかと踏んだのだ。

寒空の下、私達は男の家の前の道路を張っていた。するとしばらくして、本当に男が帰ってきた。

男は車で、助手席に若い女の子を乗せていた。どうやら電話口から聞こえた声の主らしい。男は私達に気付くと、家の前で止まらずそのまま走り去ろうとした。

カオリは目の前を今通り過ぎようとする車を止めようとしたが、無駄だった。走って後を追った。一度は止まってウィンドウをおろしたが、カオリがドアを開けようとするとそのまま走りだし、数メートル引きずった。それでも車は止まらず、とうとうカオリが手を離し、道路に転がった。

幸いたいたしたケガもなく無事だったけど、

「あいつ他に女がいたんだね。助手席であの女、笑ってた。私が引きずられてるの見て、笑いながらコワイって言ったよ。」

と力無く言った。カオリは、殴られても男を信じていたし憎むことが出来なかった。

第二十話：近づく自由

結局、カオリが男やその複雑な環境の家族のために渡していたお金は、あの助手席の彼女へのプレゼントや交際費に使われていた。あの後会って三人で話したらしいけど、彼女は風俗で働くカオリを罵倒し続けたという。信用もプライドもズタボロにされたカオリは、それでもまだ男を嫌いになれずにいた。

ツトムに頼めばお金は返してもらえる。でも、その場合の男の身の安全は保障できない。死ぬことはないと思うけど。あんな辛い思いをしたのにカオリは、男の身を案じ、このまま泣き寝入りすることを選んだ。

カオリはまだ引きずっていたけど、私もそろそろ終わりにしよう、とずっと考えていた。結局、女を風俗で働かせて平気な男に、愛なんて存在しないのだ。なんでそんなことにもっと早く気付かなかったのか。時折見せる優しさに、女は騙されやすいのだ。私も、そしてカオリもそうだった。自分が相手の為に、そして相手を変えられ、変えなきゃいけないと思っていた。本当にバカバカしい。

私とカオリは、カオリが自由になり、そして私もこれから自由を手にするという祝勝会を開くことにした。久しぶりのお酒。どれくらい行つてなかったか覚えてもないCLUBに繰り出した。そこは光と音楽と人でこった返し、無意識に私を鼓舞させる。こんなことをしているのがバレたらどうなるか、そんな恐怖を打ち消すように久しぶりのテキーラを口にした。

結局私は酔いつぶれ、カオリに担がれるようにして始発電車の待つ駅に向かった。

こんな日にまで私は律儀にツトムにお金を渡しに行った。もちろん歩けなかったから、タクシーで家まで向かいカオリに渡してきてもらったけど。でも、これで最後なんだ、と思うと安堵感でいっぱい

だ
っ
た。

第二十一話：あつけない終わり

私は決意した、ツトムにはつきり別れを告げようと。恐怖もあつたけど、それよりカオリと二人で飲み明かしたことで、何かが変わった。恐怖に勝るものがあつた。

ツトムの家のポストに合い鍵を落とすと、家に帰ってから電話をした。

ツトムは驚いた様子だった。まさか私がそんな決断をするとは思わなかったようだ。すでに鍵もポストに入れた事も話すと、意外にすんなりと受け入れた。

電話を切ると、思ったよりあつけなく、今までの生活はなんだったのだろうかと信じられない気持ちでいた。自分の部屋が妙な静けさに感じた。

だけど、そんな簡単に終わるはずがなかった。今度は、ポストに鍵が入っていないと言いだしたのだ。だけど私は確かに入れた。ポストと言ってもドアに直接入れるので、外に落ちたり誰かに取られるというのはありえないのだ。だけどツトムはないと言い張り、私が直接渡さなかったからだと責めたてた。そして、鍵を交換するからといってまた法外な額を請求しだした。

もうこれで本当に終わるなら、と家族に被害が及ぶことも示唆して素直に払った。

彼は小さい子供と遊んでいた。自分の子供だと言った。嘘か本当かわからないけど、彼は嘘つきだ。始めからきつと付き合う気なんてなかったんだろうな、と後々思う。

それから、お金はもういらなからヨリを戻してくれと電話がきて、もう他に好きな人がいるからと断ると、またコウタの名前を出してわけのなからない理由で二十万請求された。それは逃げた。というか逃げる事ができた。なんだ、逃げられたんじゃない。今までバカ

みたいに働いて渡っていた自分が本当にバカだと思つたし悔しかった。

だけど何より自由になれたことが嬉しかった。これからはもう、金を何に使つたと怒鳴られることもなく、服を買つたりご飯を食べに行つたり、好きなことができる。

風俗で働いていたことに少し引け目は感じていたけど、あつという間に平穩な日々に戻つた。しばらくは怯えて暮らしていたけど。

最終話：感謝

私はずっと母親に、

「普通になりなさい。」「普通でいなさい。」

と言われ続けてきてそれに反抗した時期もあった。自分の個性を認めてくれないんだと思っていた。母の言う『普通』というのは、自分を無くしてみんなと同じでいなさいという事なんだと思っていたから。

だけど今回の件でよくわかった。『普通』と口を酸っぱくして言っていた母は、誰よりも私の幸せを想ってくれていたのだ。『普通』の暮らしを今はとても幸せに感じるし大切になった。母の言っていたのはこれなんだ、と思った。あんな目に遭って初めて母の愛に気付くなんて本当に情けない。

自分が特別だなんて思わないけど、ああいう体験は誰でもするものじゃない。折角あんな辛い思いをしたんだから、これからはそれを活かすことも頭の隅に置こう。といっても具体的には思いつかないけど。今言えることは自分の事を一生懸命考えてくれる家族や友達は、うるさくても大事にするべきっていうこと。それと、自分で自分を大切にしようっていうこと。

私は男運はないけど、もったいないくらいの親友と大好きな家族がいる。これだけでなんて幸せ者なんだ。それなのに、自ら不幸の道突き進み私は一人なんだと勝手に孤独感に襲われた時もあった。

二度とあの道には戻りたくない。みんなそれぞれの事情があって風俗嬢になったんだと思う。ただ純粹にそういうのが好きな人っていうのは限りなく0に近く、それしか道がないと頑張っている人ばかりだった。諦めている人もいたけど、もし私達と同じような理由で働いている人や、これから働かなくちゃいけないって思っている人がいたら、もう少し考えてもらいたいと思う。

色んな道があって、決めるのは結局自分なのだ。自分を大切に考え

て、決めてほしいと思う。みんながみんなそうじゃないと思うけど、私は想像以上に辛かったし、中々抜け出せない人もいたから。入るのは自分、抜け出すのも自分。最後はなにもかも自分なのだ。そこに周りの人の支えが必要で、家族や友達以外にもいるかもしれない。

風俗やDVの話だけじゃなくて、色んな悩みがあるけど同じことが言えると思う。結局耐えたり行動するのは自分だけど、一人じゃ抱えきれないものを受け入れたり受け止めてくれる人がいるはず。そんな人は大勢はいないけど、本当に自分を大事に思ってくれてる人はいると思う。それは誰だかよく考えればわかること。人それぞれだと思うけど、自分で気付くべきだと思う。

今は辛いことがあるとあの子の事を思い出す。高校二年生の時と19歳の時と、今を比べると悩みなんて大したことない。あの日々に戻るくらいなら何でも頑張れる。そう思えるのが唯一の救いかな。私は人生で出会う人や起こる事は全部偶然じゃなくて必然だと思ってる。辛い事も楽しい事も。これからの人生に役立つ事なんだと思ってる。まだ何に役立っているのか実感はないけど、きっとそのうちわかると思ってる。今後の課題だ。そうやって気付いていくのが人生なんだ。

最終話：感謝（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。長いわりにあっさりした終わりで納得がいけないと思いますが、人生ってこんなものなんです。あれだけ長い間苦しめられた割りに、終わりはたったの1週間くらい。もっと早くに覚悟するべきでした。

現在私は23才で結婚して子供もいます。若いうちに結婚したいと思ったのは『普通』の幸せを確固たるものにしたいという願望が強かったからでしょうか。今は平穏な日々を送っています。だからこそ文章にもできたのだと思います。でも、言葉にするより辛いですね。

有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2401b/>

風俗嬢 杏奈の事情

2010年10月10日22時42分発行